

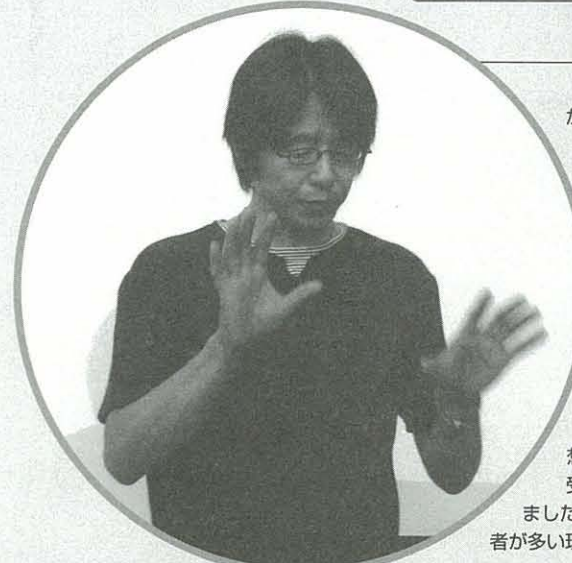
アンゲリア



「アンゲリア」はギリシャ語で「ニュース・伝言・メッセージ」という意味です。

授業訪問シリーズ No.9 美術史 — 美術作品の見方 —

授業担当教員：野村 幸弘



例年、受講生が多い「美術史」の講義ですが、美術作品の見方やおもしろさを学べると思ったのでしょ

うが、今年度の前学期もWEB履修申請で174名もの学生が受講希望しました。シラバス上の定員は100名でしたが、野村先生の寛容な判断もあって最終的に150名受講の講義となりました。

シラバスの「授業のねらい」欄には次のように記載されています。

—美術という「絵を描くこと」を思い浮かべる人が多いかもしれませんが、ここでは、美術作品を徹底的に「見ること」を学びます。美術作品は、もちろん各個人が好き勝手に自由に見ていいのですが、作品には「見方」があります。それを学ぶことで、美術作品がいかに多くのことを語りかけてくれるか気づくに違いありません。

美術作品を見ることは好きなものの「見方」については知らない私も、どのような講義が行われていくのか興味をもって臨みました。すると、先生の熱意あふれる説明が進むにつれて、プロジェクターで映し出されたさまざまな時代のさまざまな作品が、まるで「こういう点を見て欲しい、こういうことを分かって欲しい」と訴えかけてくるような印象すら覚えました。野村先生は、時代による宗教性の違いや思想の変遷を分かりやすく説明され、私も作品の「見方」の一端を理解できたような気がしました。

受講生の理解を計るためか、AIMS-Gifuを利用したレポート提出の指示を出されたことにも、感心させられました。提出されるレポートを読んで次回の講義に活かそうとする先生の熱意と努力を想像すると、毎年受講希望者が多い理由も分かったような気がしました。

全学共通教育事務局 正村 隆弘

美術史の講義について野村先生が熱い思いを語りました。

小学校のときには大好きだったはずの図画工作が、中学に入るとなぜかキライになって行きますね。理由は、絵が下手だとか、うまく表現できないとか、下手でもいいんだよ、なんて言ってもなくさめになりません。そういうときにはどうすればいいの。答えはカンタンです。作品は作らなくてもいい、見ればいいんです！ただ、どうやって見ればいいんでしょうか。自分の好きなように見ればいいとよく言いますが、それって逆にけっこうむずかしいんですよ。作品の見かたにはコツがあるんです。それは2つの作品を比較することです。その方法をちょっと身につけただけで、作品というのは、すいぶんといういろいろなことを語り始めるものです。ウンだと思ったら、「美術史」の授業に出てみて下さい！

受講生のみなさんがAIMS-Gifuの掲示板に書き込んでくれた授業への感想を以下、いくつかご



紹介します。

「今まで作品を比較して見たことがなかったので、今日の授業は新鮮でした。似た作品を比較することで、作者の特徴やこだわりがこんなにも分かりやすくなるんだ、と知って驚きました。これまで美術館に行っても見方が分からず、ただ好き嫌いで見ているだけでしたが、これからは違った視点で見られそうです。美術鑑賞の本当のおもしろさを学んでいきたいです。」

「先輩のオススメの授業の1つに美術史があり、美術が苦手だったけど、授業を取ってみました。実際、授業を受けてみて、美術に対する考えが少し変わったように思います。初めて美術が楽しいと思えました。」

「今まで美術といえば、何か作ったり書いたりばかりで、そこまで興味を持ってませんでした。けれど、昨日の授業で、絵を比較して共通点や相違点を見つけたりしたことで、新たな美術に対する視点が生まれ、興味がわいてきました。」



私が全学共通教育を受けて感じたこと

工学部 応用情報学科4年 長野 宏紀

私は工学部に在学していますが全学共通教育の科目は自分の専攻とは関係の無いものばかりでした。

ですから、これから全学共通科目を履修しようと思う方も、履修を終えた方も「なぜ自分の専攻と関係の無いものを履修しなければならないのか？」と思うかもしれません。

実のところ、私は大学に入塾して初めて全学共通科目を履修申請したときそう思いました。

しかし、いざ学び始めると正直、数学系の専門科目より週に一度の体育や心理学が楽しくて仕方がありませんでした。

皆さん、もし岐阜大学に全学共通教育が無かったとしたらどうなるか想像してみてください。

例えば工学部生なら工学部に通い詰めて専門科目ばかり学ぶこ

とになるのですが、たまには気分転換に体を動かしてみたいとは思いませんか？

自分の専攻以外で知りたいこと、興味のあることはありませんか？

大学は将来、社会で活躍していく上で必要になる専門知識を学ぶ場所ですが、それだけに留まりません。

純粋な知的探究心を満たす場でもあると思います。学んだことは全て使うためとは限りません、単純に興味を深めるのもいいと思います。

そういう点で私は全学共通教育は意味のあるものだと感じました。

教養教育への心構え

応用生物科学部 食品科学課程食品科学コース4年 中井 翔子



現在では教養＝一般教養という式が成り立っていることが多いが、教養とは本来個人の人格に結びついた知識や行い、さらにこれに関連した学問や芸術、精神修養のことを指す。無論、大学の教養教育における「教養」は後者を意味しており、したがって「人格に結びついた知識」にするためには個人が興味・関心をもって学ぶ必要があるだろう。

人の興味・関心というものには個人差があり、そのため教養科目は数多くある必要がある。実際、教養科目の選択肢は多く、おおむね教養科目の種類や数に関しては問題ないだろう。私が受けた科目の一つである「岐阜方言のしくみを学ぶ」など自分が暮らす地域に関係する科目も面白いものである。一方で、受講する側

である私たちに必要なものはやる気である。先ほど述べたようにこれがなければ始まらない。私自身、興味をもって受講した科目に関しては今でも思い出すことができ、身になっていると実感できている。そして逆説的ではあるが、やる気がなければ身にならないということも実感してしまった。必要に迫られて受講した科目に関しては正直よく覚えていない。

実際問題、興味を持てる分野というのは自分の専門に関わることである場合が多いと思う。そこで、もちろん興味・関心を持って学ぶ方が大切であることは明らかだが、多方面への関心に向けて自分の分野と関係のない科目を受講してみるのも選択肢の一つであろう。

一般教養授業の学び

医学部 看護学科4年 野原 江利子



現在4年生である私が、一般教養の授業を受けていたのは大学1年生の時。つまり今から3年前のことです。当時は岐阜大学に入学したばかりだったので、「大学の授業って一体どんなものだろう??」と不思議に思っていました。そういった期待と不安の中、大学の授業を受けていました。

一般教養でも専門分野でもそうなのですが、大学における授業というのは高校時代と大きく違って「授業を選択することができる」ということが特徴です。すなわち、自分の興味のある分野について学習することができます。そういった興味のある分野を学んでいくことで、知識を深めていけると思います。

また、私は2年生以降、専門分野の授業ばかりを受けていたり、実習があったりで、知識が専門分野に偏っていますが、一般教養の授業では、専門分野だけでなく幅広い分野—人文科学系、社会科学系、自然科学系、スポーツ・健康科学系—があること

で、自身の視野を広げていくことができる良い機会だと思えます。その機会の中で自分の学びたいことの方向性をもっていくことができるのではないかと思います。

あと、私個人としての感想ですが、一般教養の授業を選択する際はスポーツを選択することをオススメします。専門分野の授業になると、知りえる人というのはやはり学部内の人に限られてしまいます。しかし、一般教養のスポーツ分野の授業では、スポーツを通して他の学部の方と話す機会が多く、知り合いになれる良い場面ですよ！

一般教養は幅広い知識を得られたり、多くの仲間と知り合える機会のある授業です。皆さんも自分の興味の持った分野を選択し、自分の知識の幅を広げ、深めていけるように学んでいて下さい！

「理科離れを防ぐための教育—理科実験講座—」を開催しました！



新聞・テレビ報道もされましたのでご存じの方も多いかと思いますが、教養教育推進センターでは、8月11日と12日の二日間、理科実験講座を開催しました。この講座は、岐阜大学活性化経費（教育）の支援を受けたプログラム、「理科離れを防ぐための教育—理科実験講座—」の一環として行われたもので、岐阜市周辺の小中学校の先生9名、岐阜大学の学生8名が参加しました。

教養教育推進センターが去年開催したFD研究会（大学の教育改善のための研究会）で、私たちは、小中学校の先生が「薬品に触るのが怖い」、「やったことがないので自信がない」、「どんなふうに器具を準備したらいいのか分からない」などの理由からなかなか理科の実験に取り組みない現状を知りました。私たち理系の教員が理科好きになったのは、小中学生の頃、理科の先生が魔法使いのような実験を見せてくれたり体験させてくれたことや、野外で昆虫や植物あるいは星の美しさ、大地のダイナミックな動きに触れさせてくれたことに少なからず影響を受けています。理科離れが危惧されていますが、このような現状がその一因となっているのかもしれない。

講座は、11日が物理と生物、12日が化学と地学で、それぞれ3時間が割り当てられました。地学は野外（金華山）で行われました。参加した先生・学生からは「実際に実験や観察をすることができ、大変わかりやすくて良かった」という感想とともに、様々な要望も寄せられました。これらの意見を参考に、来年度に向けて講座の内容を改善していく予定です。大学の教育の目標は「何を学んだか」から「どのようなスキルを身につけたか」に変わりつつあります。

教養教育推進センターでも教養教育の中身を再検討しているところですが、講義主体のカリキュラムに、実験・実習・野外巡検をもっと取り入れていく必要があると感じています。

工学部 社会基盤工学科 地図マネジメント工学 教授 小嶋 智

編集後記

今号の「アンゲリア」は盛り沢山です。授業訪問シリーズあり、学生の声あり、理科実験講座の報告あり、と。実は、教養教育推進センターの業務は数え切れないほど多種多様にあります。でも、そのコアは教養教育の実施と改善・維持という点に尽きます。つまり、専門教育だけでは培われない知識や知性の構築に資する教育が求められているのです。この意味では、授業の紹介や高年次生の教養教育体験談などは、文字通り

の「アンゲリア」（伝言）として、このニュースレターを読むおにも1年生の人にとって役に立つことでしょうし、そう願っています。これらのシリーズは今後も掲載していく予定です。「この授業を紹介したい、あの授業の情報を載せて」など、希望がありましたら、遠慮なく全学共通教育事務局（ここが教養教育の実務を担っています）へお伝えください。「アンゲリア」してください。

編集責任・教養教育推進センター 副センター長 中川 一雄